
*** クルワール ***

あくあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クルワール

【Nコード】

N2703C

【作者名】

あくあ

【あらすじ】

岡崎りおは高校1年生。父の海外転勤で9月にオーストラリアの学校へ編入することになったのだが、部屋の整理をしているときにふと小さい頃に書いたピンクのノートと見つけた。表紙には「まほう」と書かれていた……

くプロローグく

「魔法はね…あるんだよ。」

につこり笑った彼女が、私には魔法使いに見えた…

「りおー！！準備進んでるのー？」

階段の下からお父さんの足音とお母さんの声が聞こえた。

「大丈夫ー！！もうすぐ終わるからー。」

お母さんは安心したのかお父さんに「何探してるの？」と声をかけた。

私は岡崎りお。今年の4月に高校1年生になった15歳。

今は8月。やっと仲の良い友達がたくさんできたのに、急にお父さんの

海外転勤が決まってしまい9月にオーストラリアの学校に編入することになった。

お父さんは貿易関係の仕事をしてる……らしい……

自信がないのはお父さんの働いてる会社や姿を見たことがないからだ。

まあ、私とお母さんを養ってるわけだから、働いてるんだろうなあ…

「コレは…捨てていつか。わっ！…何コレ…小学校の時に採ったどんぐり？」

汚い袋を机の奥から引っ張り出し、すぐにゴミ袋に捨て、Ｔシャツで手をぬぐった。

一昨日からオーストラリアに行く為に部屋を片づけていた。

「あとちよつとだ……うん？」

手を伸ばすと、机の後ろにはさまったピンクのノートにぶつかった。ノートの表紙には、『まほう』と歪んだ文字が書いてあった。

「何だろう……」

ぺらぺらとめくると人間がとんがった帽子をかぶり、

木の杖を持ち、真っ黒なマントを足までひろげ、箒にまたがっている絵が

何個も描かれていた。その人間の脇には何やらぐちゃぐちゃと言葉らしき

ものも書かれていた。

「小学校…１年生とか、そこらへんに私が書いたのかな…？」

しばらくその時の記憶を思い出そうとしていると、ふと、

腰辺りまで伸ばしてある真っ黒な髪を後ろで一本にくくり

切れ長の目をこっちに向けて笑みを浮かべている女の子が見えた。

「（誰……？小学校の時の友達？）」

私の記憶の中で、彼女がぱちぱち瞬きをしたようだった。

「あ……！！ユリアちゃん……！！」

りおはパツと目を開き、自分の心臓が少しドキドキしているのに気

がついた。

「ユリアちゃんだ…1年生の時、1年間だけ同じ小学校だった。」

彼女は周りの人とは少し違っていて、私達を少し見下しているように休み時間は真つ黒な本を1人で読み、たまにブツブツと1人で何か呟いている

私以外友達の居ない女の子だった…

入学したての時はみんな彼女にも声をかけていたが、あまりにも彼女が

みんなを無視するので、次第に彼女は浮いた存在になっていた。

そんな彼女と私が親しくなったきっかけは、彼女の読んでいる本のタイトルに

「まほう」という文字が見えた時のこと。

知らないうちに私は彼女に声をかけていたのだった。

「まほお…好きなの？私も好きなんだ！」

私は幼稚園の頃からテレビや絵本で読む魔法使いにとっても興味を持っていた。

小学校の友達は、あまり興味がないようだったので彼女の読んでいる本に

「まほう」と書いてあっただけでつい嬉しくなってしまったのだ。

「うん。魔法って……不思議だね……」

彼女がなぜ私とは話をしてくれたのかその時の私には分からなかった。

それから彼女と魔法について毎日話をしていた。私は自分の考える魔法使いと魔法の呪文をノートに書き、彼女に自慢気に見せていた。

ユリアちゃんがにっこり笑うと、私まで笑顔になってしまっただった。

「そうだ……ユリアちゃん……2年生になるときに転校しちゃったんだ。」

お別れの時、わんわん泣いた記憶がはつきり思い出された。どんなときも大人な雰囲気彼女はにっこりと笑って言った。

「りおちゃん。泣かないで。また私達、きっと会えるから。」

私は涙でぐちゃぐちゃの顔を彼女に見せ、「ほんと？」と聞いた。彼女はまたにこっと笑って答えてくれた。

「うん。だって私達には魔法で結ばれてる。それまでお別れなだけだよ。」

私はとても嬉しくなって、「うん！」と元気よくユリアちゃんと笑いあった。

そして彼女が彼女の親に呼ばれ、車へ向かおうとしたとき彼女は私の方を1回振り向き、目を細めて笑った顔で少し声を小さくしてこういった。

「魔法はね……あるんだよ。」

第1話　青天の霹靂

「あのね。りおに話さなくちゃいけないことがあるの。」

真面目な顔をして私を見つめる両親は、見たこともないくらい真剣だった。

荷物整理が一段落したのでキッチンへウーロン茶を飲み、階段を降りると

お母さんが「あ！」と私の方を見て居間へ来るよう手招きをした。

「何ー？すぐ終わる？」

「あなたによるわね。」と言いながら母は居間へ入っていった。

後ろを追いかけるともう母と父が並んでテーブルの前にいたので何だろうつりおは眉をつり上げ、目を細めた。

りおが2人の向かいに座るやいなや母が口を開いた。

「今週の金曜日にはもうオーストラリアへいくでしょ？」

思いがけない言葉にりおは拍子抜けしてしまった。

「うん……え？何？それがどうかしたの？」

2人は顔を見合わせて、もぞもぞと体を動かした。
ふうー…と母は息を吐いた。

「りおは…… オーストラリアに行かないのよ。」

「はああ!!??!!??」

りおは目をこれ以上開かないというくらいに見開いて目の前にいる人が

たった今発した言葉が理解できないような顔をした。
そんな反応だと思っていたのか、母は言葉を続けた。

「あのね。りおに話さなくちゃいけないことがあるの。」

「そうじゃなきゃ話は進まないよ……」

りおは目を泳がせた。

「お父さん。あなたが言ってくださいな。」

父はピクツとしてすぐに首をかしげた。

「俺は……俺からは、なんというか……話しくいつてか……上手く言えないな。」

母は大きなため息をついた。りおはその行動に不安を覚えた。

母が小さな声で「私にだって上手く話す自信ないんですからね。」
とお父さんに伝えたのを聞き逃さなかった。

「（何？何なの？私に荷物整理させて、オーストラリアの学校に編入するってまで
言っただくせに……私は日本に残れてこと??どうしてこんなに深刻そうなの？）」

私は頭の中でぐるぐるといんな考えが音を立てているのが聞こえてきた。

するとお母さんがおもむろに隣に置いていた段ボールを私の方にくっつと押し出した。

「なに…こ」

「開けてみてちょうだい。」

私の言葉を遮ってお母さんは段ボールをまたぐつと押した。大分前のような段ボールを私はゆっくりと開いた。

「…！！」

その中にはこれからの私の未来を大きく変える物がたくさん詰め込まれていた。

「りお…」

りおは段ボールから目が離せなかった。

「それは全部これからのあなたにとって、すごく必要な物なのよ。さっきお父さんはそれをずっと探してたの。見つかって良かったわ。全く。少し古いのは…」

あなたが産まれたときからとっておいたものだから…」

お母さんはお父さんに次の言葉を言わせるようにお父さんの脇腹を肘で突つついた。

「あー…りおには、9月からクルール魔法専門学校に行ってもらんだ。」

第2話〜秘密〜

「くる……わーる魔法??は……??」

私は夢でも見ているのだろうか……

しばらく私は穴が開くほどお父さんを見つめ、開いた口がふさがらなかった。

その沈黙を破ったのは、横にいたお母さんだった。

「りお。それがクルワール魔法専門学校に必要な物なの。大事にしてね。」

にこつと母はりおに向かって笑みを浮かべた。

りおは何から聞いて良いのか分からず、口をぱくぱくさせた。

「うーんと……説明するわね?」

りおの様子を伺いながら母は言った。りおはこくこくつと小刻みに首を縦に振った。

「りおが小学校に入る前……ああ。あなたが産まれてすぐに……いや……それよりもまず、こっちな。りおはお父さんの仕事がなんだと思ってる?」

りおはやっぱり……と思った。お父さんがしている仕事を常に怪しいと思っていたからだ。

「貿易関係……って聞いてたけど……やっぱり違うの？」

母は「あら。疑ってはいたのね。」と少し目線をおとした。

「お父さんは本当は、『魔法薬危険物取扱い専門会社』という所で働いてるの。」

「まほ…危険物???何それ。」

りおはわけがわからず苦笑いをした。

「魔法薬というものがあるんだけど、その中で人体に影響を及ぼす物の成分と…」

まあ入っている魔法をお父さん達が調べて危険な物だけを探し出すみたいな仕事ね。」

お父さんは「オホン。」と咳払いをした。

「ごめんなりお。ずっと隠してて……」

父は眉間にしわを寄せながらりおの反応を見ようとした。

りおははっとしたように我に返り、身を乗り出した。

「で…でもなんでそんな変なところでお父さんが働いてるのよ!! 変よ!!」

そんなのお父さんが魔法使いだって言ってるみたいじゃない!!」

母は、りおをじっと見つめていった。

りおは言った後にもかして……と目を見開いた。

「そうよ。お父さんは魔法使いなのよ。もちろん私も。そして…りお、あなたもね。」

「お……お母さん……も??私……も??」

「ええ。だってあなたは私達の血を受け継いでるんだから。」

りおはどうしたらいいのか分からなくなり、床の絨毯の毛玉をぶちぶちちぎった。

母も父も、りおが落ち着くまで待っているようだった。

りおは頭の中で「魔法があるって信じてたけど、そんなの、死んだって関わる事が

無いって思ってたのに……これは夢?夢なのかな?やっぱり……」と繰り返した。

10分くらいたったとき、ようやくりおは少し落ち着いたのか言葉を発した。

「お父さんもお母さんも…その…魔法の学校に行ってたの?」

りおはちらつと母と父を見た。

「ええそうよ。とっつても楽しいところだったわ!ねえお父さん。」

「ああ。」

りおはまた絨毯をぶちぶちし始めた。

「そ…それで…話の続き……。」

「そうね。私達は魔法使いだけど、普通の人達と一緒に暮らさなくちゃいけないのね。」

まあ、そこら辺はいろいろとあるみたいなんだけど…でも働くのは魔法使い専門の

会社じゃなくちゃダメなのよ。えっと…うっかり魔法を使っちゃうかも知れないし…

あなたが産まれたとき、すぐにクルワール魔法専門学校の案内書が来たから

もうクルワールに行かせようと思ってたわ。契約も済ませたし。」

一気に母が話すので、りおは目が回った。

「自分が魔法使いだって知らなくてりおが魔法を使ってしまったらお父さんの職が

なくなっちゃうもの。そういう規則だから。それは困るでしょ?」

「私…魔法なんて使ったこと無いけど…」

母は「当たり前よ!」と笑った。

「だって魔法を使えるのは16になってからだもの。だから私達はあなたが

16になったからオーストラリアに行くのよ。」

「え?なんで?」

「なんでって…りおだけクルワール魔法専門学校に行ってこのうちから居なくなったら

周りの人からすごく怪しまれるでしょ?だから私達はオーストラリアにいくことにして

あなたはクルワール学校に行くのよ。分かる？」

なるほど……とりおは頷いた。

「お父さんもオーストラリアに行っても仕事先は変わらないし。」

「え！？オーストラリアにもあの…魔法なんとか危険物って会社があるの！？」

お父さんがあぐらをかき直しながらりおに言った。

「あのな、魔法薬危険物取扱い専門会社は1つしかない。俺たちが世界中のどこにいこうと場所は変わらない。そしてどこにいようと行けるんだよ。」

りおは夢の世界にいるような感覚に陥った。

「どっということ？」

「つまり、クルワール魔法専門学校も、魔法使い達の会社もこの人間界にあるわけじゃないんだ。別の世界、魔法界にあるんだよ。」

いつのまにか私は涙が出るほど自分の頬をつねっていた。痛い…夢ってこんなに痛さを感じるものだったけ？

「魔法…界って…どこにあるの？お父さん…どうやって行ってるの？」

「うちの家の物置の床に、小さい扉があるの知ってるか？」

物置…庭の隅にある物置には小さい頃に入ったことがあるけど……
扉なんかあったんだ……

「そこに入って呪文を唱えると魔法界へ繋がるんだ。オーストラリアの
家にも同じ物を魔法学会のやつに作ってもらったんだぞ。すごいだ
ろ。」

すごい…確かにすごいけど、こんな現実とはほど遠い話をお父さん
とお母さんが
ためらいもせずに私が信じると思って話している方がもっとすごい。

「じゃあ。たくさん準備があるから、明日には魔法界に行くぞ！」

え？早いでしょ！！と言おうとしたが、
お父さんは立ち上がって居間から出て行ってしまった。

「お母さん……」

「もう。お父さんったら…あとの話は簡単にするわね。りおが小学
校に入るとき
またクルワールから手紙が来て、あなたが本当に魔法使いか確かめ
るって

ことが書いてあったのよ。もちろん落ちるはずなんかないのよ？私
達の子だし。

でもまあ一応規則ってことで…それでちゃんと合格できたから安心
したわ。」

「合格って…私試験とかした記憶ないよ？」

「あなたのクラスにユリアちゃんって子がいたの覚えてる？」

りおは心臓がはねたような感じがした。

「その子がりおを監視してたのよ。りおは人一倍魔法に興味を持ってたし、

ユリアちゃんはりおの普通の子とは違うオーラを感じ取ってすぐに合格と伝えたわ。」

ユリアちゃん……魔法使いだったんだ……でもなんでユリアちゃんが??

「ユリアちゃんのお父さんは魔法界でも偉い人なのよ。だから。」

私の心を読んだようにお母さんが言葉を続けた。

「これでもう十分でしょ？お母さん疲れちゃった。

その荷物部屋に持って行ってよく見ていると良いわ。明日出発なんだもの。

あ。それはあなたが産まれたときにお父さんが嬉しくてすぐに買ったの。

学校で古いって言われたらお父さんを恨んでね。夜ご飯できたら呼ぶわ。」

母はりおの横を通ってキッチンの方へ行ってしまった。

「夢じゃないみたい……」

りおの頬は手の後がくつきり見える程真っ赤になっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2703c/>

* クルワール *

2011年1月19日14時53分発行